

令和3年度特別支援教育に関する実践研究充実事業  
(その他政策上の課題の改善のための調査研究)  
成果報告書(概要)

|            |
|------------|
| 受託団体名      |
| 国立大学法人筑波大学 |

1. 研究のテーマ

人工内耳装用児の言語活動・能力の評価と指導のあり方

2. 研究の名称

人工内耳装用児の言語活動の充実に関する調査研究  
—話し言葉と書き言葉の充実に向けた指導のあり方の検討—

3. 研究代表者

| 氏名    | 所属             | 役職 |
|-------|----------------|----|
| 伊藤 僚幸 | 筑波大学附属聴覚特別支援学校 | 校長 |

4. 事業の実績

(1) 研究の目的・目標

|   |
|---|
| 研究の目的   |
| 本研究は、人工内耳装用児の言語活動の充実に向けた指導のあり方を検討するため、聴覚口話法を中心とした教育を行う特別支援学校(聴覚障害)小学部に在籍する人工内耳装用児を対象に、音声言語を中心とした話し合い活動における指導実践を行い、その効果や課題を検証する。   |
| 研究の目標   |
| 人工内耳装用児の言語活動・能力に関する実態を把握するために、調査研究として、言語活動(「聞く・話す」能力と態度)に関する評価と客観的評価法による評価(読書力、平均装用閾値、発音明瞭度)の結果を分析する。また、実践研究として、個別の指導計画やPDCAサイクルの実践記録に基づく指導実践並びに、人工内耳装用児の言語活動に関する実践事例を分析する。 |

(2) 研究の内容

|  |
|--|
| 1. 調査研究  |
| 人工内耳装用児と補聴器装用児の各学年群(2・3年生の群と4-6年生の群)を対象に、言語活動に関する評価として「聞く・話す」能力と態度の評価結果を分析し、客観的評価法による評価として読書力診断検査の評価並びに平均装用閾値、発音明瞭度を分析した。また、「聴覚障害児の言語能力などの発達に関する全国調査研究」(テクノエイド協会, 2012)において、聴覚障害児の言語発達に装用閾値が影響を与えることや聴力(補聴効果)、発話明瞭度、言語発達は相互に関連性を有することが指摘されていることから、人工内耳装用児と補聴器装用児の読書力、平均装用閾値、発音明瞭度の関係を分析した。さらに、評価に基づく類型化により、人工内耳装用児と補聴器装用児の言語活動 |

・能力の特徴を検討した。

## 2. 実践研究

四つの研究グループ（①わたりの指導（話し言葉から書き言葉へのスムーズな移行を意図した指導）に関する研究グループ、②話し合いを通じた読みの指導に関する研究グループ、③デジタル教材を利用した指導に関する研究グループ、④読み方や話し方の指導に関する研究グループ）を編成し、各研究グループごとに設定したテーマ（指導目標）のもとに、個別の指導計画やPDCAサイクルの実践記録による評価や検討に基づいて指導実践を行った。また、調査研究により示された類型化に基づいて指導実践事例を分析し、人工内耳装用児の言語活動における指導の効果や工夫に関する考察を行った。

### （3）事業の実施日程

| 実施時期    | 実施内容  |
|---------|---|
| 令和3年5月  | 個別の指導計画の作成<br>「言語活動評価チェックリスト」作成のための調査<br>PDCA記録用紙（様式）作成のための調査   |
| 令和3年6月  | 「言語活動評価チェックリスト」の作成<br>PDCA記録用紙（様式）の作成<br>「言語活動評価チェックリスト」による事前評価の開始（実践研究）  |
| 令和3年7月  | データ収集・整理と分析方針の検討（調査研究）<br>「言語活動評価チェックリスト」による事前評価終了（実践研究）<br>研究グループの編成とテーマ（指導目標）の設定（実践研究）<br>PDCA記録用紙記入例に基づく教員間の共通理解（実践研究） |
| 令和3年8月  | 言語活動・能力に関するデータ分析（調査研究）<br>PDCAサイクルに基づく指導実践と指導に関する検討（実践研究）   |
| 令和3年9月  | 言語活動・能力に関するデータ分析（調査研究）<br>PDCAサイクルに基づく指導実践と指導に関する検討（実践研究）   |
| 令和3年10月 | 言語活動・能力に関するデータ分析（調査研究）<br>PDCAサイクルに基づく指導実践と指導に関する検討（実践研究）   |
| 令和3年11月 | 言語活動・能力に関する考察とまとめ（調査研究）<br>PDCAサイクルに基づく指導実践と実践事例の作成（実践研究）<br>指導実践に関する報告会の開催（研究協力校教員）                                      |
| 令和3年12月 | 言語活動・能力に関する考察とまとめ（調査研究）<br>PDCAサイクルに基づく指導実践と実践事例の作成（実践研究）<br>人工内耳装用児や難聴児教育に関する研修（日本聾話学校）                                  |
| 令和4年1月  | 言語活動・能力に関する考察とまとめ（調査研究）<br>PDCAサイクルに基づく指導実践と実践事例の分析（実践研究）<br>人工内耳装用児や難聴児教育に関する研修報告（研究協力校教員）<br>成果報告書の作成                   |
| 令和4年2月  | 読書力診断検査による評価と分析（実践研究）<br>成果報告書の作成   |

|        |                                    |
|--------|------------------------------------|
| 令和4年3月 | 研究の成果の紙面報告（大学教員・言語聴覚士）<br>成果報告書の提出 |
|--------|------------------------------------|

（４）研究の成果

調査研究の結果、人工内耳装用児の「聞く」能力と態度と、「話す」能力と態度は、相互に関連しながら発達すること、人工内耳装用児の「発音明瞭度」は言語能力に関係すること、人工内耳装用児は、比較的言語能力の高い児童と言語能力に何らかの課題を抱える児童に大きく二分され、装用閾値が低くても言語能力に課題を示す場合があることが示された。また、人工内耳装用児4年生から6年生の中には、「読解力」が中程度以上であるが、「語彙力」や「文法力」が低いという、聴覚障害児の読書力に関するこれまでの報告（田中・斎藤，2006；田中・斎藤・四日市，2009）には見られない、新たな課題を示す児童の存在が認められた。

また、実践研究の結果、これまで補聴器装用児に対して行ってきた指導法、例えば、目の前の事柄や具体的な行動が伴う事柄を話題にしたやりとり、指示に従って正しく行動することをねらいとした指導、根拠を求めたり、経験を想起させたりする発問などが、言語活動・能力に課題のある人工内耳装用児にも有効である可能性が示唆された。また、人工内耳装用児の特性、例えば、聞こえのよさなどを生かした指導の工夫も認められ、今後の指導における効果が期待された。また、実践事例の中には、児童自身が自らの理解の状態を評価できるような工夫や配慮が認められ、人工内耳装用児と補聴器装用児の双方にその効果が期待できるもののほか、人工内耳装用児の特性を考慮した手立てや働き掛けもみられた。

（５）研究の課題と次年度以降の方策

研究の結果、人工内耳装用児の「聞く」能力と態度と、「話す」能力と態度は、補聴器装用児と同様に、相互に関連しながら発達することが示されたが、それらの発達については、両者の間で違いがあることも考えられる。また、言語活動において、人工内耳装用児にはどのような能力や態度が身に付きやすいのか、あるいは育ちにくいのかといった情報は、人工内耳装用児の特性に応じた指導のあり方を検討する上で極めて重要である。したがって、「読む・書く」活動も含めて、さらに「言語活動評価チェックリスト」の項目別評価の結果について分析を進め、人工内耳装用児の言語活動に関する特徴を検討する必要がある。

また、言語活動・能力に関する評価に基づく類型化により、人工内耳装用児の言語活動・能力に関する幾つかのタイプが認められた。類型化に基づく実践事例からは、言語能力に課題のある人工内耳装用児に対して、補聴器装用児に対するこれまでの手法の有効性が示唆されるとともに、人工内耳装用児の特性を生かした指導の工夫も認められた。人工内耳装用児の特性に応じた指導のあり方を検討するためには、この類型化に基づいて、更に実践事例を積み上げる必要がある。そこでは、補聴器装用児に対する実践事例との比較を通じた、PDCAサイクルの実践記録による評価と実践事例の分析により補聴器装用児に対する指導効果との共通性や違いなどを検討することが必要であると考えられる。